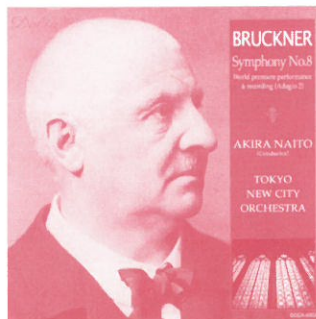


東京ニューシティ管弦楽団  
第46回定期演奏会

2006年6月2日(金)19時開演  
Tokyo Metropolitan Art Space  
東京芸術劇場大ホール  
主催:東京ニューシティ管弦楽団

音楽現代2月号…今月の3枚のCD 交響曲(推薦) レコード芸術2月号…新譜月評 交響曲(準推薦)



音楽専門誌も  
絶賛!!

**ブルックナー:交響曲第8番ハ短調**  
〈アダージョ〉世界初演&ライブ録音  
第3楽章アダージョに1999年発見のブルックナー自身による改作稿を使用

**ブルックナー:交響曲第4番**  
国際ブルックナー協会版第3稿世界初演

CD好評発売中  
各定価¥2,625→会場販売¥2,300 内藤 彰 指揮 東京ニューシティ管弦楽団

音楽現代10月号…今月の3枚のCD 交響曲(推薦) レコード芸術10月号…新譜月評 交響曲(準推薦)



**「運命」「田園」はこう変わる!**  
日本初・新版によるベートーヴェン交響曲ライブ録音CD

〈新版によるベートーヴェン交響曲チクルス 定期演奏会ライブ録音〉プライトコップ社の新版を使用した現時点での唯一の録音!一部旋律とハーモニーも従来の版とは異なります。是非お聴き比べください。

定価¥2,625→会場販売¥2,300 発売元:デルタ・エンタテインメント  
内藤 彰 指揮 東京ニューシティ管弦楽団(2004.4.24/2003.11.26 東京芸術劇場大ホール)





**指揮:内藤 彰 Akira Naito (Conductor)**

名古屋大学理学部卒業。在学中より指揮を山田一雄氏に師事する。桐朋学園大学研究科(指揮専攻)にて、小澤征爾氏、秋山和慶氏、尾高忠明氏他に師事し、修了後(社)山形交響楽団の専属指揮者を3年間務める。これまでに新日本フィル、東フィル、東響、新星日響、シティ・フィル、神奈川フィル、名フィル、九響他、日本の多くの主要オーケストラを指揮。1990年東京ニューシティ管弦楽団を設立。

海外では、1991年ベオグラードフィルを指揮、1992年には、モスクワ音楽院大ホールにて、モスクワ交響楽団を指揮し、ロシア音楽の魂を日本人から教えられたと絶賛された。その後1996年5月、ロシアの国立ヴァロニッシュ歌劇場にて、『セヴィリアの理髪師』を、1997年5月には、ベラルーシ国立歌劇場にて『蝶々夫人』を指揮。また2001年3月サンクトペテルブルグ・カペラ交響楽団、2002年5月ロシア国立ウリヤノフスク・アカデミー交響楽団に客演し、新聞各紙に大きく取り上げられた。2001年12月北ハンガリー交響楽団、2002年7月ミラノスカラ座フィルのメンバーを中心とする州立ロンバルディア室内管弦楽団の北イタリアツアーを、2003年3月にはメキシコ州立交響楽団を指揮。

2004年1月に行なわれた歌劇『蝶々夫人』の公演にて、作曲家プッチーニの強い願いにもかかわらず初演以来一度も使われてこなかった、日本の伝統的‘かね類’(寺の釣鐘の音、お椀型のキン、風鈴他)に、12音の音程を持たせ‘楽器’として特注創作、それにより作曲者の願う本当の『蝶々夫人』の世界初演に成功し、音楽界の話題となった。更に2004年7月には、イタリアのプッチーニ・フェスティバルにおいて、この鐘が使用され、地元の新開・テレビに大きく取り上げられた。

‘04年9月には、ブルックナーの交響曲第8番のAdagio楽章の新稿を、楽譜を起こすところから関わり、世界初演を果たした。この演奏会の話題は、多くの新聞、音楽雑誌を賑わしたのみならず、ライブ録音のCDは、『レコード芸術』誌他で、非常に高く評価されている。東京ニューシティ管弦楽団と共に行った日本初のプライトコップ新版によるベートーヴェン交響曲チクルスは大いに注目を集めた。現在、東京ニューシティ管弦楽団、及びプロ混声合唱団「東京合唱協会」音楽監督・常任指揮者。

日本指揮者協会幹事。



**ピアノ:小林 亜矢乃 Ayano Kobayashi (Piano)**

東京生まれ。桐朋学園「子供のための音楽教室」を経て、東京音楽大学ピアノ演奏家コースに特待生で入学。全学年、奨学金を授与、首席で卒業。在学中、播本三恵子、田崎悦子、倉沢仁子、各氏に師事。

第64回日本音楽コンクール・ピアノ部門に入選。ケルン音楽院にてパヴェル・ギリロフ教授のもとで研鑽を積み現在に至る。ディプロムを室内楽・ソロにおいて最高点、首席で卒業。コンツェルト・イグザーメン(国家演奏家資格取得コース)に在籍。イタリアAMAカラブリア国際ピアノコンクールで第二位、エンニョ・ポリーノ国際ピアノコンクールで第三位他、多数の国際コンクールにて上位入賞。

ハンガリー国立交響楽団とのデビュー後、オランダ・コンセルトヘボウホールにてネザールランドフィルハーモニー管弦楽団、ブダペスト・リスト音楽院にてハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団、ブラハドヴォルザークホールにてチェコフィルハーモニー交響楽団と共演の他、名古屋フィルハーモニー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団の定期演奏会に出演。また、2005年日本フィル九州公演ではソリストとして招かれ、九州各地で大絶賛を博す。スペインのセビリア・スプリングフェスティバルに招待され、聴衆全員のスタンディングオベーションを受ける。ドイツでもリサイタルを行い、新潟や福岡震災のためのチャリティーコンサートを行うなど、国内外で活躍している。

NHK-FM、MRT(ハンガリー国営放送)、WDR(西ドイツ放送)に出演。類稀な深みのある音楽で、聴衆を魅了する音楽家として、今後の活躍が期待されている。



**ソプラノ:臼木 あい Ai Usuki (Soprano)**

2003年東京芸術大学声楽科卒業、2006年同大学大学院修士課程独唱科修了。伊藤京子・高丈二の両氏に師事。大学3年時に安宅賞を、卒業時には松田トシ賞およびアカンサス音楽賞を受賞。二期会オペラストゥーディオ第47期マスタークラスを最優秀賞及び川崎静子賞をもって修了。2003年、毎日新聞社・NHK共催「第72回日本音楽コンクール」声楽部門第一位。同時に松下賞、聴衆の投票による聴衆賞も受賞。同声会主催「同声会新人演奏会」及び、読売新聞社主催「第73回新人演奏会」に出演。

オペラではこれまでに、モーツァルト作曲「魔笛」夜の女王、「フィガロの結婚」スザンナ、シューベルト作曲「四年間の哨兵勤務」ケートヒェン(日本初演)などを演じる。2005年7月には、東京二期会オペラ本公演・ブッチーニ作曲「ジャンニ・スキッキ」(指揮:クリスティアン・アルミンク、演出:カロリーネ・グルーバー)のラウレッタ役で二期会オペラデビュー、同年11月には日生劇場オペラ公演・團伊玖磨作曲「夕鶴」(指揮:現田茂夫、演出:鈴木敬介)のつう役で主役デビューを果たした。12月には「夕鶴」の韓国公演にも出演。また大学在学中の2002年、朝日新聞社主催「第52回芸大メサイア」のソプラノソロを務めたのをきっかけに、ヘンデル作曲「メサイア」、ハイドン作曲「天地創造」、モーツァルト作曲「戴冠ミサ」など宗教音楽のソリストとしても活動している。

2004年12月にはサントリーホールでのパッハ・コレギウム・ジャパン「メサイア」にソリストとしても出演した。東京フィル・新日本フィル・神奈川フィル・日本フィル・札幌交響楽団・東京シティフィル・関西フィル・東京交響楽団・芸大フィルなど、オーケストラとの共演も数多い。NHK-FM「名曲リサイタル」、テレビ朝日「題名のない音楽会21」にも出演。隅々までコントロールされた美声と、豊かな感情表現は若手の中でも群を抜いており、今後の活躍が大いに期待されるソプラノである。二期会会員。



## ■この演奏会のプログラミングについて

当夜は交響曲新旧37番を枠組みとして、モーツァルト時代の演奏会を模し、モーツァルトの音楽の粋であるピアノ協奏曲とアリアを演奏する。

モーツァルトの生きていた18世紀後半の演奏会は現代とはまるで違っていた。協奏曲や交響曲のそれぞれ全曲を前半と後半に並べるような大曲中心主義ではなく、歌ありピアノあり管楽器あり、様々なジャンルのアラカルト(一品料理)を並べ、歌手や器楽奏者たちの名人芸を楽しむためにまるで幕の内弁当のような賑やかなプログラムを組むのが常であった。そして交響曲とは演奏会の序曲や終了の音楽であり、演奏会という「祝祭」即ち非日常と日常を分かちつものだった。興味深いことに今夜のプログラムのキーとなるポストホルンセレナードには、当時の音楽会を象徴するように交響曲、舞曲、協奏交響曲の要素が共存しているが、これは二つのうちひとつが第35番交響曲になったハフナーセレナードなどでも同様であり、だからこそ交響曲としての再構成が可能だったわけである。

当時の演奏会の開始と終了には、別の交響曲を使用したり、1曲を分割演奏するなど様々なやり方があったが、今回は二つの交響曲を使うことで両者の聴き比べも可能になっている。またピアノ協奏曲は当時よくあったように一つの楽章だけを演奏するのではなく、全曲演奏というように多少現代風に合わせてある。

## ■モーツァルト、その愛

今夜演奏されるコンサートアリア「アルカンドロよ、私は告白する」はモーツァルトファンには周知のことだが、モーツァルトが熱愛したアロイジア・ウエーバーのために書かれたものである。彼は結局失恋してしまうのだが、何とアロイジアの妹と

結婚し、その後も彼女のためにコンサートアリアを何曲か作曲している。だがこの曲こそアロイジアへの恋愛中に書かれた唯一のものなのである。そしてこの恋愛期間中にモーツァルトは愛する母をも失ってしまい、その際、有名な2通+1の「母の死」の手紙を書いている。さらにアロイジアはこれまた有名なことだが、彼女の妹でモーツァルトの妻となったコンスタンツェと共に「魔弾の射手」の作曲家カール・マリア・フォン・ウエーバーの従姉にあたり(ウエーバー自身、この姻戚

# PROGRAM NOTES

浅岡 弘和 (音楽評論家)



関係を自慢していたという)、彼女の夫となった俳優のランゲは未完成の肖像画「ピアノを弾くモーツァルト」を残した素人画家でもある。アロイジアは「後宮からの誘拐」や「劇場支配人」の初演、「ドン・ジョヴァンニ」のウィーン再演など、モーツァルトのオペラにもしばしば出演した歌手だが、彼女を想定して書かれたソプラノパートを見ると超人的な技巧を誇る素晴らしいコロラトゥーラ・ソプラノだったらしい。(余談だが「後宮からの誘拐」のヒロインの名は妻の名と同じコンスタンツェであり、これを演じたのが妻の姉のアロイジアであったというのも「コシファントウツェ」ではないが、ちょっとした「とりかえばや物語」であろうか。)アロイジアはモーツァルトの死後、ランゲと離婚し半世紀近くも生き抜いたが、1839年にモーツァルトが生まれた街であるザルツブルクで生涯を閉じた。

アンコールで演奏予定の「どうしてあなたを忘れられようか」は「フィガロの結婚」初演でスザンナを歌った英国出身の歌手ナンシー・ストレスのために書かれているが、モーツァルトファンには彼女がモーツァルトとプラトニックな恋愛関係にあったと信じる人も多い。

## 曲目解説

### ■「旧」交響曲第37番ト長調K444

モーツァルトの交響曲第37番は現在欠番になっているが、その理由はこの「旧37番」が今年没後200年を迎えたミハエル・ハイドンの交響曲にモーツァルトが序奏を付けたに過ぎない偽作であると判明したためである。現在ではまず演奏されないが、序奏部分の自筆譜が残っていたため、ただ爽やかなだけでモーツァルトらしからぬ出来映えにも関わらず1907年まで永く番号付正規交響曲としてまかり通っていたのである。モーツァルトに於ける真贋論争を考える上でもまことに興味深いケースだが、当夜、演奏される新旧37番はモーツァルトの生前は奇しくも両曲ともブラハ交響曲と共に、序奏付き、メヌエットなしの3楽章構成の交響曲として扱われていたのである(モーツァルトの交響曲で序奏を持つのは他に「リンツ」と39番があるだけ)。

弦楽合奏にオーボエ2、ホルン2という初期交響曲の標準編成だが、三部形式で書かれたト長調の第2楽章では前半に持ち替えてフルート1本が使用される。またハ短調の中間部にはファゴットの独立したパートを持つ版もあり、今回はその版による。そして第2楽章後半からフィナーレにかけては再び標準編成に戻されるのである。

### ■ピアノ協奏曲第20番ニ短調K466

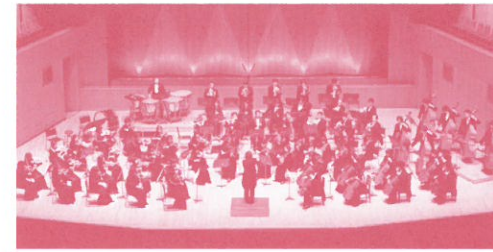
言わずと知れた短調のモーツァルトである。小ト短調交響曲同様シンコペーションで始まる第1楽章は古典的な複提示を採り、形式的には取り立てて新味はないが、内容的には内心を吐露する呻くような出だしに始まる疾風怒濤の音楽である。第2楽章中間部のト短調の疾走がいい例だが、これはロマン派の激しい感情表現の先駆であり、それまでは単に名人芸の誇示として書かれることの多かった協奏曲の革命とさえ言える。即ちこの曲は彼のピアノ協奏曲の分水嶺であり、これ以降の全ての曲は多様な傑作揃いとなっている。フィナーレはニ短調のロンドソナタ形式により重厚な構成で書かれているがニ長調の長いコーダが附されており賑やかに元気良く終わる。

### ■コンサートアリア「私は愛情を気にしない」K74b

18世紀の大詩人メタステーオの歌詞により、第1次イタリア旅行中、15歳のモーツァルトによって作曲された少年時代の佳作。婚約者の弟から密かな想いを告白された王女が動揺しながらもからかうようになじる様を軽快に描写し、既に華麗なコロラトゥーラも。



## 東京ニューシティ管弦楽団 TOKYO NEW CITY ORCHESTRA



東京ニューシティ管弦楽団は、1990年、音楽監督・常任指揮者に内藤彰を擁し設立された。定期演奏会の他、名曲コンサート、オペラ・バレエとの共演、音楽鑑賞教室、レコーディングなど幅広く活躍。年間5回行われている定期演奏会では、古典奏法も加味したブライトコップ新版によるベートーヴェン交響曲チクルスの他、新しく発見されたブルックナーの楽譜使用など、斬新な内容は高く評価されている。

オペラの分野では特に評価が高く、二期会、藤原歌劇団のオペラ公演の他、レナータ・スコット、アルフレード・クラウス、ヘルマン・プライ、ルチアーノ・パヴァロッチイ、カルロ・ベルゴンツィ、アグネス・バルツァ等世界で活躍するオペラ歌手との共演も数多く、聴衆や批評家のみならず、世界の著名オーケストラと共演している彼らからも、心からの絶賛の言葉を贈られている。バレエの分野では、国内の主要バレエ団の他、英国バーミンガム・ロイヤルバレエ団、ミラノスカラ座バレエ団、シュツットガルトバレエ団、モンテ・カルロバレエ団、ロシア国立レニングラードバレエ団等海外からのバレエ団の日本公演にもこれまで数多く出演し、公演をサポートする誠実で質の高い演奏が毎回非常に高い信頼と評価を得ている。また、桂三枝、江戸家小猫、三枝成彰、中島啓江等を迎えてのファミリーコンサートや、Jリーグ・アウォーズ、さだまさしツアーなどポピュラーの分野でも、大変評判がよく、多くの方々から親しまれている。

### ■間奏曲「ロンド」ト長調

ポストホルンセレナードK320に含まれる二つの協奏交響曲の楽章の一つで第4楽章に当たる。セレナードという楽曲は廃れてしまった形式なので演奏会で取り上げられる機会もほとんどないが、このロンドはフルートとオーボエの呼応が美しい、捨てるに惜しいすぶるチャーミングな佳曲なので、間奏曲やアンコール曲として多用されるのが望ましい。或いはこの楽章があるが故に「ポストホルン」はセレナードに戻されてしまったのかもしれない。

### ■レチタティーヴォ「アルカンドロよ、私は告白する」～アリア「どこから来たかは知らない」K294

これもメタスタジオの歌詞により、モーツァルトが前述のように恋するアロイジアに気に入られようと心血を注いで作曲した力作。歌詞はそれと知らずに別れた我が子を罰しようとしている老王の心にわき上がる不思議な予感を歌ったもので本来は男性用だが、モーツァルトは女声用に作曲した。弦楽のみの伴奏によるレチタティーヴォに長大なアリアが続くが、ここでは当時まだ珍しかったクラリネットが使用されておりモーツァルトの意気込みを表すかのよう。短い中間部は快速調で疾走し後半は再びアンダンテに戻るが、ソプラノの最高音は変ホに達する。

### ■「新」交響曲第37番ニ長調K320「ポストホルン」

1779年、23歳のモーツァルトが完成した7楽章のセレナードには史上初の傑作交響曲が内包されていた。これは200年間交響曲の歴史から全く無視されて来た「交響曲」を新37番として復活させようという従来の交響曲史観を覆す画期的な試みである。この曲は新全集が出て以来、1・5・7楽章の3楽章版としては時々演奏されていたらしくアバドはポストホルンなしのポストホルン交響曲を録音していたが、メヌエットをも含めた4楽章の完全な交響曲として演奏されるのはおそらく150年ぶりと思われる。第6楽章を含めさえすれば「ポストホルン」という愛称も使えるのだが。

第1楽章の序奏はまだ短い「聖戦」という感じの荘厳でしずしずとした音楽であり再現もされる。主部はプラームス「第2」のようにDC#Dという動きで開始されるが、第2主題部分ではモーツァルトの「天※わからずやのコロレドの譜例敵」ザルツブルク大司教コロレドが見事にカリカチュア化され（譜例参照）擲擲される。